

サマライズ講座（要約英日文法）

第 3 講

1. 要約英日文法適用例

第 1 講、第 2 講に続き、要約英日文法の適用例を示す。ここでは、ルール 8 からルール 12 までを取り上げる。

まずは第 1 講から用いてきた[例文 A]を用いる。第 2 講の終わりに示した日本語訳の文章を元に、リライトを行ない、要約文を仕上げよう。

[例文 A]

第 2 講までの手順を見ても分かるように、ルールは一度に適用するのではなく、順に適用しながら徐々に要約文として完成させる。本講では、(Step1)から(Step3)の 3 つの段階に分けて、リライトし仕上げるプロセスを示すことにする。もちろん、それぞれのルールをどの順で適用するのかは、要約文の元となる文章に応じて考えなくてはならない。これから示すのは、[例文 A]に適した手順であり、これを参考に、実践では各文章に適した手順でルールを適用する必要がある。

(Step1) → 【ルール 12】を適用する

これまでは、重要箇所を選択もセンテンス単位で行なったが、ここからは一つのセンテンスのなかから、要約文に含めたい、より重要な部分を選び出す（一つのセンテンスをすべて選ぶ場合もある）。[例文 A]の場合に、要約文に含めなくても良いと考えられる部分に取り消し線（———）をつける。

~~100 年ほど前の「賢馬ハンス」以来、科学者は動物に数学の能力があるという主張には懐疑的だ。この馬はヨーロッパの人々の前で算術などの知的作業を実演して大評判になったのだが、実は飼い主の無意識の動きを手がかりにしていた。¹~~

ところが最近の研究で、いろいろな動物が数を数えている例が新たにわかり、数学の能力がこれまで考えられていたよりも生物に基本的なものである可能性が示されている。^あ

¹ 【ルール 12】 簡潔な表現を用いる

たとえば具体例、詳細説明などを省けるかどうかを検討する。

~~る条件下では、サルが大学生を上回る能力を示す場合もあるようだ。~~

~~ニュージーランドにあるウェリントン大学のバーンズ（Kevin C. Burns）らは、倒木に複数の穴を開け、穴ごとに違う数のゴミムシダマシの幼虫を入れて、野生のニュージーランドコマヒタキという鳥から見えるよう野生生物保護区のなかに置いて観察した結果を昨年夏の Proceedings of the Royal Society B 誌に発表した。鳥たちは虫の数が最も多い穴に群がっただけでなく、鳥が目を離れた際にバーンズが一部の虫を取り除くと、2倍の時間をかけて穴を検分し、いなくなった虫を探した。「この鳥たちはおそらく、小さな数（3 とか 4）を区別する能力を生まれつき持っているのだろう」とバーンズは考えている。「そうした数の感覚を日常的に使っているので、試行錯誤しながら最終的には 12 くらいまでの数を識別できるようになる」ともいう。~~

さらに最近では、ヒヨコが算数の能力を持っていることをイタリアのトレント大学のルガニ（Rosa Rugani）の研究チームが実証し、同誌 4 月号に報告した。

ロチェスター大学のキャントロン（Jessica Cantlon）は過去 5 年間の一連の実験で、アカゲザルの計算能力が人間に匹敵しうることを示している。

また、デューク大学のブラノン（Elizabeth Brannon）もアカゲザルを使って実験し、耳で聞いた音の回数と同じ個数のものを、目で見ただけのものなかから選べることを示した。聴覚と視覚という異種感覚にまたがって、数合わせができるわけだ。

ブラノンは、動物は言語的な数感覚は持っていない（頭のなかで「1、2、3」と数えているのではない）が、数字に頼らず物体の集合を寄せ合わせることで大雑把な計算はでき、その能力は生まれつき備わっていると考えている。

~~30 年にわたるオウムのアレックスの研究で知られるマサチューセッツ工科大学のペーパーバーグ（Irene Pepperberg）は、小さな量ならハチでさえ学習によって区別可能になるという。~~

動物に数感覚をもたらしている生物学的基礎の理解が進めば、幼児教育に関係してくるかもしれない。~~ブラノンによると、ふつう 4〜5 歳から教え始める算数を、もっと低年齢から教えられる可能性もあるという。~~

(Step2) → 【ルール 9】、【ルール 10】、【ルール 12】を適用する

(Step1)で選んだ重要部分に対し、必要に応じて表現の追加／削除を行なう。

科学者は動物に数学の能力があるという主張には懐疑的だ。

ところが最近の研究で、いろいろな動物が数を数えている例が新たにわかり、数学の能力がこれまで考えられていたよりも生物に基本的なものである可能性が示されている。

ニュージーランドにあるウェリントン大学のケヴィン・C・バーンズらは、倒木に複数の穴を開け、穴ごとに違う数の虫を入れて、鳥から見えるよう観察した結果を昨年夏の

Proceedings of the Royal Society B 誌に発表した。鳥たちは虫の数が最も多い穴に群がっただけでなく、鳥が目を離した隙にバーンズが一部の虫を取り除くと、穴を検分し、いなくなった虫を探した。 「この鳥たちはおそらく、小さな数（3 とか 4）を区別する能力を生まれつき持っているのだろう」とバーンズは考えている。

さらに最近では、ヒヨコが算数の能力を持っていることをイタリアのトレント大学のローザ・ルガニの研究チームが実証し、同誌 4 月号に報告した。

¹ロチェスター大学のジェシカ・キャントロンは過去 5 年間の一連の実験で、アカゲザルの計算能力が人間に匹敵しうることを示している。

また、デューク大学のエリザベス・ブラノンもアカゲザルを使って実験し、耳で聞いた音の回数と同じ個数のものを、目で見ただけのものなかから選べることを示した。

ブラノンは、動物は言語的な数感覚は持っていない（頭のなかで「1、2、3」と数えているのではない）²が、数字に頼らず物体の集合を寄せ合わせることで大雑把な計算はでき、その能力は生まれつき備わっている³と考えている。

マサチューセッツ工科大学のイレース・ペーパーバーグは、小さな量ならハチでさえ学習によって区別可能になるという。

1 【ルール 10】 表現を単純化しすぎない

重要部分を抜き出しただけの、単なるセンテンスの羅列にしないこと。前後のつながりを考慮して適当な語を追加／削除する。また、一つのセンテンスを二つに分ける、前のセンテンスとつなげる、などの方法もとることができる。

網かけと下線で示した部分では、こうした処理が可能と考えられる。以下、同様。

2 【ルール 9】 読み手に合わせた表現を用いる

文章中に出てきた用語に対して、その意味説明が書かれていることがある。一般読者向けの要約文を作成する場合には、理解のしやすさも考慮し、そのような説明部分も適宜、要約文に含める。

この例文の場合で言えば「言語的な数感覚」が一般的に分かりやすいかどうか、要約文全体の分量はどうか、などを考慮しながら検討する。

3 【ルール 12】 簡潔な表現を用いる

要約文の表現はできる限り短く分かりやすいものを選ぶ。ただし、くれぐれも意味や内容が変わってしまわないように注意する。

たとえばこの例の場合、「生まれつき備わっている」→「生来の」などのように短い表現に置きかえることも可能。そのほかにも例文中、□で示した箇所などはより簡潔な表現に置き換えられるだろう。また、誰かの発言内容を直接引用している場合も、その趣旨を汲み、間接的に表現するのも方法の一つである。

動物に数感覚をもたらししている生物学的基礎の理解が進めば、幼児教育に関係してくるかもしれない。（約 750 文字）

(Step3) → 【ルール 8】を適用する

全体を通じて、内容面、あるいは表現面の不備がないかどうかを確認し、要約文として完成させる。

科学者は、動物に数学の能力があるという主張には懐疑的だった。

ところが最近の研究で、いろいろな動物が数を数えている例が新たにわかり、数学の能力がこれまで考えられていたよりも生物に基本的である可能性が示されている。

ニュージーランドのウェリントン大学、ケヴィン・C・バーンズらは、昨年夏、次のような観察結果を発表した。倒木に開けた複数の穴に、それぞれ違う数の虫を入れると、鳥たちは虫の数が最も多い穴に群がり、さらに一部の虫を取り除くと、穴を検分し、いなくなった虫を探したというものだ。バーンズは鳥たちに小さな数を区別する能力があると考えている。さらに最近では、ヒヨコが算数の能力を持っていることをイタリアのトレント大学のローザ・ルガニの研究チームが実証し、報告した。

他にも、ロチェスター大学のジェシカ・キャントロンや、デューク大学のエリザベス・ブラノンがアカゲザルを使った実験を行ない、それぞれ成果を報告している。ブラノンは、動物は言語的な数感覚は持たない（頭のなかで「1、2、3」と数えているのではない）が、物体の集合を寄せ合わせて大雑把な計算をする生来の能力があると考えた。また、マサチューセッツ工科大学のイレヌ・ペーパーバーグによれば、小さな量ならハチでさえ学習によって区別可能になるという。

このように、動物に数感覚をもたらししている生物学的基礎の理解が進めば、人間の幼児教育に影響がもたらされる可能性もある。（約 604 文字¹）

1 【ルール 8】 要約率を考慮する

要約文の分量が適切であるかどうかを考慮する。目的の要約率とかい離している場合には、重要箇所の選択や表現の簡潔化など、要約文作成プロセスのいくつかの点で調整が可能。

この例の場合、元の英文は約 820words なので、日本語に換算すれば約 2050 文字に相当する。第 3 講でのルール適用前の日本語文（第 2 講の終わりに記載）は、おおよそ 1020 文字、したがってその時点で要約率を考えれば、約 50%になる。それに対し、第 3 講でのリライトを行なった結果、Step2 後の要約文では、おおよそ 36%となり、Step3 後の要約文では、おおよそ 29%となった。

もう少しルールの適用例を見てみよう。

[例文 C]

…… それは確かに組織を急成長させるには、最高の妙薬といえるかもしれない。しかし、その用法を誤ったり、あるいはペースがあまりに拙速であると、大きな陥穽に陥る危険性を孕んでいることもまた否定できない事実である。

ここで注意すべきは、上述のリスク要因は必ずしも内部要因、外部要因ともに単独で現れるとは限らず、むしろ、通例、内部要因、外部要因の中の様々なリスク要因が複合的に絡み合いながら現象するとみるべきだという点である。

今後、M&A を通じて急成長を企図する企業は、本稿でとり上げたリスク要因の複合的作用を見据えつつ、総合的視座から¹、内的要因については「調整」を、外的要因については「対応」を適切に図る必要にいっそう迫られることになる²と思われる²。……



最後に、M&A は企業組織が急成長を遂げるための妙薬ではあるが、M&A を通じて急成長を企図する企業は、本稿でとり上げた諸々のリスク要因にかんがみれば、今後、内的要因については「調整」を、外的要因については「対応」を適切に図る必要に迫られることになる。

（出典：『M&A における失敗リスクの研究』）

1 **【ルール 11】 重複する表現を避ける**

重複する表現があった場合、元の意味を変えずに簡略化する。

この例文での「リスク要因の複合的作用を見据えつつ、総合的視座から」という内容を変えずに表現し、かつ文字数の少ない言い方を考える。たとえば、ここで用いられている「諸々のリスク要因にかんがみれば」など、文章全体を通じて違和感のないものにするよう注意する。また「適切に図る必要にいっそう迫られる」を「適切に図る必要に迫られる」としても、要約文としては問題ないだろう。

2 **【ルール 12】 簡潔な表現を用いる**

この例では「と思われる」は省略可能とし、省いている。

[例文 D]

…… M&A には多くの効果が期待されているが、その主なものとしては下記の 8 つをあげることができる。

1. アービトラージ(arbitrage)

M&A に期待される効果には、大きく分けてフィナンシャル型と戦略型とがある。アービトラージは、主として前者すなわちフィナンシャル型にかかわる効果である。アービトラージとはいわゆる裁定取引という意味であり、価格差を利用して利ぎやを稼ぐ取引である。M&A の場合、買収価格と転売価格の価格差すなわち差益を得ることを目的としている¹。

例えば、純資産が時価総額を大幅に上回っている企業の場合には、経営権を握るための過半数の株を買い取って、その後その資産を転売すれば莫大な利益を得ることも可能となる。この場合、PBR(Price Book-value Ratio, 株価純資産倍率)が 1 倍割れの企業や現預金ないし現金化しやすい資産を必要以上に溜め込んでいる企業、すなわちキャッシュリッチな企業が狙われやすいとされる。……

2. シナジー効果(synergy effect)

シナジー効果とは、複数の企業内のコンピタンス(competence)が融合することによって生まれる相乗効果をいう。例えば、インターネットの会社と証券会社がそれぞれのコンピタンスをもち寄ってネットトレーディングの会社を立ち上げるという場合にはこのシナジー効果が期待されているといえよう。

2005 年前半にライブドアがニッポン放送の株を時間外で大量に取得し買収を仕掛けた際も、また同年の後半に楽天が TBS 株を買い進んだ際にも、インターネットと放送局とのコンピタンスの融合によるシナジー効果の問題が取りざたされたことは周知のとおりである。……

3. 市場支配力(market power)

経済学、特に産業組織論の立場において、M&A に期待される最もポピュラーな効果としては、この市場支配力の向上があげられる。市場支配力とは、製品の価格、数量、知覚品質(perceived quality)等に関して市場や取引相手をコントロールする力を意味する。……

1 **【ルール 9】 読み手に合わせた表現を用いる**

論文などの専門性のある文章では、要約文の読み手が内容に関する知識をある程度持っている想定できる。文章中に専門的な用語が出てきたときでも、要約文では詳細な記述を省く場合もある。

ここに示す例では、元の論文のなかでは経済用語の意味を説明しているが、要約文ではそれらを省いている。

4. 規模、範囲の経済性(economy of scale、economy of scope)

水平的M&Aが生産や販売面等でスケールメリット、すなわち規模の経済性をもたらすことは多言を要しない。また、完全な同業種でなくとも関連業種であれば、M&Aによる範囲の経済性が期待できる場合がある。……

……

上述のとおり、M&Aには少なくとも上記8つの効果が期待されている。だが、現実にはその期待通りにはことが運ばないケースが極めて多いといわれている。先に述べたように、米国においては成功する事例より失敗する事例のほうが多いといわれている。以下、その失敗のリスク要因の問題に立ち入ることにしよう。

……



M&Aに期待されているアービトラージ、シナジー、規模の経済性、市場支配力、リスク・コントロール等々のM&Aに期待されている効果を整理し、そのうえでそうした効果を減殺ないし消失させるリスク要因について、内的要因と外的要因に分けて検討を加える。

（出典：『M&Aにおける失敗リスクの研究』）